

4シーズンに採取した艾葉成分含有軟膏のアトピー様皮膚マウス (NC/Nga mice) における薬効評価

○日置 智津子¹, 小野坂 敏見², 荒井 勝彦¹, 新井 信¹ (¹東海大医 東洋医学, ²神戸学院大栄養)

【背景と目的】乳児から成人まで、アレルギー素因を有し皮膚トラブル、特にアトピー性皮膚炎 (AD) にて東洋医学的治療を希望する患者は多い。これらの患者は複数のアレルゲンに対して IgE 抗体を産生しやすいが、全ての抗原との接触を避けることは困難である。抗炎症効果があり、皮疹や皮膚状態の改善を維持的に行える外用剤が必要である。本研究は、採取時期の異なる艾葉の精油成分を用いた軟膏を調製して、その薬効と特徴、有用性について検討した。【方法】除毛後、4% SDS 液で皮膚バリアを破壊した 10 週齢雌、NC/Nga マウスの背部と耳殻皮膚に、ダニ抗原を週 2 回 3 週間反復塗布してアトピー様皮膚症状を発現させた。その過程において、抗原を塗布しない日に週 5 回 2 週間と週 2 回 1 週間、4 月採取艾葉エーテル抽出成分含有軟膏、同様に 6 月、8 月および 10 月採取艾葉同抽出成分を用いて調製された、計 4 種の外用剤を群別 (各群; n=6) に塗布した。抗原だけを塗布した群をコントロールとした。惹起開始から 7 日ごとに臨床的評価し、総 IgE を測定して病理組織を顕微鏡下で観察した。【結果】本軟膏は耳介では有意な抑制は認められなかった。しかし背部において、各群で特徴的な AD 様皮膚病変進行阻止が見られた。特に 6 月、8 月、10 月艾葉でコントロールに比べて臨床所見の効果 (発赤、痂皮、浮腫、擦傷) が得られた。病理所見では 4、6、8 月採取において肥満細胞の増多阻止、10 月では肥満細胞増多抑制、真皮における炎症細胞浸潤抑制が見られた。8 月、10 月は他群に比べて表皮の肥厚を抑制した ($P<0.05$)。総 IgE 値は 4 月艾葉軟膏群がコントロール群より上昇したが、他群に差は認められなかった。本軟膏は維持的に使用できると考えられた。